

ワークショップ「ELSI への取組における課題とその対応」

ファシリテーター：白井 哲哉（京都大学 学術研究展開センター 融合研究創成部門 副部門長）

白井 皆さん、おはようございます。もう一回、おはようございます。ありがとうございます。二日酔いの方もいるかもしれませんが、先ほど説明がありましたとおり、きょうは昨日とは打って変わって、皆で頭をフル回転させてワークをしますのでよろしくお願いします。座る席を迷っている方、大丈夫ですか。座ってみたものの、ここでいいのかどうか分からないという人も大丈夫ですか。

それでは、きょうはどのようなワークをするのかということをお話したいと思います。その前に、私からイントロダクションを紹介したいと思います。私は京都大学で URA をしています。京都大学は約 10 年前の 2012 年に URA 組織をつくりました。そのときから、私も URA として 10 年ほど、活動しています。その前は京都大学の人文科学研究所や生命科学研究所に所属して、科学技術社会論を研究していました。このときに、昨日、登壇した水町さんと同僚でした。また、きょうは忙しくて参加していませんが、小林傳司先生に大変お世話になって科学技術社会論を勉強しました。

きょうの ELSI との関わりについては、私は、URA になる前はゲノムの ELSI の研究をしていました。ゲノムの ELSI にどのようなものがあるかということだけでなく、それに対する実践、取り組みも研究していました。昨日、ELSI と RRI の違いについての話もありましたが、まさにこの時代において、ゲノムの ELSI についてはゲノム研究者のほうから取り組まなければいけないという文脈で研究をしていました。日本では、文部科学省の予算でユニットがつくられ、そこで動いていました。また、社会技術研究開発センター等でも小林先生にお世話になりました。その後、URA になりましたけれども、そのときは宇宙科学の ELSI、現在はパンデミックの ELSI、社会技術研究開発センターの科学技術の、ELSI への包括的実践プログラムのプロジェクトでサポートをしています。

私の紹介はこのくらいにして、きょうは何をするのかという話をしたいと思います。きょうは、12 時までワークショップを 2 本立てで行います。一つ目は ELSI への取り組みにおける課題の抽出、整理です。昨日、皆さんと一緒に勉強したように、ELSI と書いてありますが RRI と捉えてもらいたいと思います。ELSI/RRI の取り組みにおける課題です。ELSI 自体が課題という日本語訳が付いていますが、その課題ではなく、ELSI に取り組むために何がハードルとなっているのかという意味です。

その整理をした後に、ELSI/RRI に取り組むために、その課題にどのように対応すればいいのかということをお皆で検討したいと思います。最終的な目的は、それを皆で共有して、その結果を持

ワークショップ「ELSI への取組における課題とその対応」

ち帰ることです。きょうはさまざまな方が来ていますが、ファンディングエージェンシーの方、研究者の方、そして URA の方が多いと思います。自分の組織に持ち帰り、自分の組織での ELSI/RRI への取り組みが行われるときに自分は何ができるのか、自分の組織は何ができるのかということに少しでも役立つ情報を皆でつくって共有して帰るということがきょうの目的です。

それでは、ワークショップを始めたいと思います。急に ELSI/RRI を行うときにどのようなハードルがあるのかと言われても、朝一番で頭が回らないのではないかと思います。これが終わるとすぐに、個々のメンバーの皆さんに付箋へ書いてもらいます。書いてもらうために、まずは昨日の講演内容を思い出してください。二日酔いは大丈夫ですか。思い出してください。

思い出してもらうために、私のほうから少しだけ具体的にどのような取り組み活動があるのかということ整理したものを用意しました。それを見てもらいながら、昨日の話を思い出してください。昨日、まずは小林先生、小山田先生からは ELSI とは、RRI とはということについて紹介してもらいました。その後、各先生がたから具体的な取り組みの話がありました。

三つほどの段階があるかと思います。一つ目は課題の調査です。ELSI/RRI と言われている課題の調査、標葉さんの中では論点抽出という言葉が使われていましたが、それがどのくらいあるのかということ調査研究する、調べるというステップがありました。一番上に書いていますように、その研究プロジェクトにおいて何が ELSI として存在するかを明確にして俯瞰するということを、誰もが行っていたと思います。なぜ、このことが皆さんに必要なのかというと、ELSI に取り組むためには多様な関係者と共有しなければならないからです。論点を明確にするのは大事なファーストステップであると思います。

調査する内容については、澤井先生のもの、標葉さんのものなど、さまざまにありました。そもそも、どのような課題が、研究者、協力者、政策担当者、受益者、一般市民などの誰に対して存在しているのかという説明がありました。また、専門家と非専門家とのギャップに関しても、標葉さんから、リテラシー、研究の意義目的、リスク、ベネフィットなど、どのようなギャップがあるのかということたくさん紹介してもらいました。

またその研究をどのように調べるのかということもありました。文献調査、ウェブ調査、アンケート調査などが挙げられていました。例えば、澤井先生は身近な研究者から聞いたということでしたし、標葉さんはテキストマイニングされた結果も出していました。また、イベントを開催して調べるなど、さまざまな方法があると思います。

次のステップは、どのような対応案があるのかということです。論点を抽出しただけでは、取り組みにはなりません。どうするのかを検討しなければいけません。澤井先生は、調査の後に多様な関係者と個々の問題について検討し、考察したと紹介していました。多くの課題は、単一の専門家や関与者だけでは解決できないという状況が多かったように思います。ですから、どのように進めるかということでは、まず多様な関与者に向けて説明しなければいけません。研究者 1 人だけが知っていても議論はできません。専門外の人に向けた分かりやすい説明が必要です。

また、研究プロジェクトやその ELSI に取り組む意義なども説明し、共有する必要があるということでした。

多様な研究者や関与者を集めた、学際的な議論の場も必要だという事例がありました。多様な関係者を集めるだけではなく、議論ができる場のデザインも必要でした。そして、多様な関係者を集めただけでは答えは出てきませんので、熟議を促すファシリテーションや、コンセプトやアイデアを可視化させることも挙がっていました。奥原先生はデザインシンキングについても言っていたと思います。そのようなことをして多様な関係者と議論をして考察する、どのように対応案を考えていくかということも ELSI の取り組みの一つとしてありました。

最後は、案を考えて終わりではいけないので、その案からどうすればいいのかということです。澤井先生の場合は、提案という一つのアクションを紹介していました。これは ELSI のテーマ、扱う題材によって変わると思います。澤井先生からも最後に問題提起をしていたように、誰がどこまでそれを行うかということも ELSI のテーマ、題材によって違うと思います。ここに書いてありますように、どんな活動においても、その研究者の中だけで閉じていくのは良くありません。何らかの広報活動というアクションが ELSI に対する取り組みでは出てくるとのことだと思います。

最後のスライドは ELSI に対する取り組みです。この後、皆さんブレインストーミングでこれを行うためにはどのようなハードルがあるのか、課題があるのかということを考えてもらいますが、そのときに誰がするのかという話です。昨日の紹介でも、まずは必ず研究者が出てきます。テーマに該当する自然科学の研究者、または倫理、法、哲学の研究者、それから STS（科学技術社会論）やテクノロジー・アセスメントの研究者が挙げられます。澤井先生のように哲学の研究者や、標葉さんのような科学技術社会論の研究者が取り組みをしていくためには必要だということでした。加えて、ここに一通りまとめていますが、多分、これだけではありません。きょう集まっている URA と呼ばれる専門人材も必要です。

例えば、先ほどの話を振り返りますと、一番上にある調査研究においては、さまざまな調査研究がありますが、それをどのように行うかというサポートをする人が要るかもしれません。学際的な議論の場をつくるには、研究者を紹介しなければいけません。標葉さんのように、研究者をこの方に紹介するという方法や、澤井先生が求めている研究者を紹介するというマッチングも必要です。それに加えて、異分野の研究者を集めてコーディネートする、つなぐ人材が必要だという話もありました。アカデミアと多様なセクターをつなげられる人材、デザインシンキング、サービスデザインができる人材、それからアウトリーチ、広報の人材も必要です。ELSI の取り組みの中には必ず広報が出てきます。単に情報発信をするという意味の広報ではなく、広報戦略を立てること、実行計画を描くことも大事なアクションだと思います。

それから、資金がなければさまざまなことができません。ELSI への取り組み自体にも資金が必要になる場合もあります。このようなことの全体を、テーマの自然科学の研究者、代表者が 1

人で行うのは難しいです。全体のマネジメントをどうするのかということが必要です。このような機能、役割、人が必要になると思います。

ざっと話しましたが、昨日の話は思い出しましたか？ 3人くらいがうなずいていますが、固まっている方が多いですね…。取りあえず、皆でブレインストーミングを行いましょう。では、ワークショップを始めようと思います。私から指示を出しますので、何をしたらいいのか分からなければ聞いてください。各グループの仲間の1人は、事前にこのようにワークショップをするということを話しています。リーダー的に行ってもらいたいと思います。手を挙げてください。分からなかったら、この人に聞いてください。そして、そのリーダーが分からなければ、私に聞いてください。

始める前に、少し遅れて来た人もいますので、今から各グループで、3分でアイスブレイクとして自己紹介をしてください。呼んでほしい名前、私の名前は白井です、白井と呼んでくださいとか、座右の銘は「猪突猛進」ですというようなことを1人10秒で、リーダーから反時計回りに始めてください。では、お願いします。

(了)